

『トランプ政権、そして日米関係
の今後の展望』 感想



平成 31 年 3 月 24 日 松井和明
(39 年社卒)

渡辺先生の講演は、ホットな情報も多かったが、一言でいえば、予想通りのものであった。トランプ論は米国のメディアなどの二次情報を基本に、根拠を示し解説、説得力はあったが、想定内のものであった。それに比べ、先生の持ち味である<文化人類学>分野、アメリカ社会論は、現地調査・インタビューなどによる観察、一次情報を基に冷静に整理されている。講演テーマから見て、この面に触れていた
たのは難しいのではないかと思っていたが、参加者から、白人至上主義や銃規制の質問を受け、俄然、先生らしいアメリカ論が火を噴き始めた。想定外の見識が発揮され、充実した議論となった。以下、トランプ論、アメリカ社会論、渡辺靖論に絞り、所感を述べたい。

トランプ論:2020 年大統領選の帰趨は「トランプは実績を評価され圧倒的支持を得て共和党の指名候補となる。民主党には勝てる素地があるが、しかるべき候補が出せるか、トランプは現職の強みを発揮できるか、などにかかる」とのことであった。しかし、トランプの実像として、アメリカ第一主義を背景に、①予測不可能というが、選挙公約にこだわること、②厳しい球から始める交渉スタイル、乱暴なやり方、③独裁者に友好的、などを指摘された。その内容は、ジャーナリズムの世界、ベストセラーになったトランプ論である、『トランプ』TRUMP REVEALED (16 年)、『炎と怒り—トランプ政権の内幕』(18年)、『恐怖の男』(18 年)を思い起こさせた。曰く、「勝つためには強引で嘘、脅し、マフィアに通じた弁護士を使い訴訟を多用(30年間で訴訟1900 件、被訴訟 1450 件)、特に 敵や批判者は激しく攻撃、『屈するな、戦え』が信条」。トランプの特徴は、『『ディール』は得意、嗅覚・直感・第六感が鋭い。無知だが文書は読まない。政治戦略を立てる能力はない、思いつきで動く、自分をコントロールできない。人には好かれたい、忠誠心を重視する』。フロリダの別荘入手のやり口も登場する。「トランプは変わらない、変えようとする彼のスタイルが制約される」。「『真の力とは恐怖だ』、トランプは『小学生程度の理解力だが、自説を全く変えない』とのマティスらとのやり取り」など。「トランプは、自らが独裁者」としてヒトラーに例えられ M・ムーアの映画、『華氏 119』にも登場する。

アメリカ社会論:白人至上主義は、トランプの登場で大きく変化した。選挙中から地下にいた人たちが表に出てきた。自分らと似た人が大統領になったと。今や、白人は人口の 60%程度しかおらず、45 年には半分を切るの、自分たち

のアメリカではなくなる。その分マイノリティが進出。白人は後退。学歴社会で大卒でもかつて高卒の人の仕事、タクシー運転手の職しかない、市場競争力が低下、恵まれない白人。マイノリティはアフーマティブ措置で、優遇され、移民やマイノリティに金が行く。今や、白人は社会システムの中の被害者、自分たち白人にも権利を与えて欲しい。建前だけで社会から排除されており、メディアもそれを加速と。かのバノン建前だけの世界、その闇の勢力を壊したいと動いている。**銃の問題**は、連邦政府を倒す権利、武装する権利は建国以来憲法で認められた不変の権利。大統領の権力も縛られている。銃のロビー、ライフル協会は金も力もあり、銃所持に反対するとつぶされる。今、3 億丁の銃が出回っている。規制よりは皆に銃を持たせる、教師にも銃を持たせることが抑止力となり平和になると。

渡辺先生論:一言で「アメリカ社会を研究する文化人類学者」。51 歳には見えず、若々しく、冷静でアカデミックな印象。日本人でありながら、保守的なアメリカの数十の白人家族に入り込み、三年間にわたり内情を詳しく聴取、名著『アフター・アメリカ』をものできたのも、純粋でさわやかな学研肌のお人柄ならではのことと思われる。上智大学卒から即、大学院に入り、博士号を取るまで 6 年半、20 代のほとんどを過ごした「ハーバード大学は、アメリカ理解の原点」。しかし、アメリカに対する思いは、好きでも嫌いでもなく、あくまで**観察対象**であり、深い愛着はないと意外な言葉。慶応大学に招聘され教授となり、入学式で八千人を前に全学を代表して挨拶される逸材。新著『リバタリアニズム』は、中央公論社刊にも拘らず、週刊『東洋経済』(3 月 2 日号)で詳しく記者にヒアリングされた記事が出されたのも、「リバタリアン」という内容故であるが、先生によれば東洋経済新報社からは書評委員を託されている由。最前線で活躍される多忙な日々の由であるが、今度は、ヒスパニックや黒人の世界にも光を当て欲しいと思う。





「花田清輝展」を観る

2019年3月15日 虎長

僕が初めて読んだ花田の本は「復興期の精神」。戦時下に思想弾圧に抗して「韜晦(とうかい)=ねこかぶり」のレトリックを用いて書かれた評論を集め戦後すぐ出版。リズムカルな文体が魅力で、他の著書もかなり読んだ。花田の文体のファンには五木寛之がおり、大庭みな子は「クックッ」と笑いながら読んだという。

3月3日に神奈川近代文学館に足を運んだ。なぜここでの展示会か：日曜日のギャラリートークで加藤学芸員が、花田が1945疎開した親戚の留守番として鎌倉材木座に家族ごと住んでいたこと、子息の黎門氏(元東北大学金属研究所教授)が遺品を神奈川近代文学館に寄贈したことが理由と説明。

三木清は昭和研究会で近衛文麿と関係があり、総力戦体制への関与と批判を併せ持っていたが、投獄の理由が仮保釈中の高倉テルにお金を渡したことで、敗戦直後獄中死したのは気の毒だ。非線形(直截でなく)に抵抗をした花田との比較なら、三木と同じく西田門下で獄中死した戸坂潤の方が適切と思うがどうだろうか。戸坂の抵抗は線形(直截)だったから。有名な(悪名高き?)3つの論争：本展は、花田が戦後、他の文学者・評論家と行った論争を少しずつ紹介していた。花田は新日本文学編集長時代、文芸評論を新日本文学には一切書かなかったが、宮本顕治の圧力で編集長を辞めさせられてから、「シラミつぶしに」評論を始めた。その強烈さに、高見順が花田を「ゴロツキ」呼ばわりしたことから「ゴロツキ論争」が始まった。「近代文学」同人の埴谷、荒正人を相手にした「モラリスト論争」で、花田は彼らを「道徳的可否ばかり論じて目的を失ったモラリスト」と呼び、埴谷らには、花田清輝は目的のためには手段を選ばないマキャベリストに見えた。

本展で印象に残ったのは論敵の一人埴谷雄高による花田への友情的な弔辞の掲示だった。埴谷は後年、自分の誤りに気付いたのでなかろうか。埴谷と同じく1060年代中ごろから1970年代に学生に人気があったのは吉本隆明。当時、僕は吉本にどうして人気が集まるのか理解できなかった。「吉本・花田論争」は、どちらの勝ちとも本展は断言していないが、吉本の勝ちで終わったように言われることが多い。バカバカしくて花田が止めてしまったのが真相のようだ。花田が戦時下に右翼系の出版社に勤めていたことを吉本は攻撃し、花田は戦後転向したと批判した。が、花田がその出版社で書いたものは、

軍統制への批判であり、戦後転向というわけではない。戦時下の戦争責任だけで知識人を切り分ける吉本に対し、彼らに戦争責任はあるが戦後責任も問題にしろ、という花田の方が柔軟で正しいと思う。「復興期の精神」1946年10月我観社戦時下に書かれた評論を集めたもの。ダンテ、レオナルド、コペルニクス、ポー、ヴィヨンなど西洋古典について論じ、巧みなレトリックを用いた独自の文体と博覧強記ぶりで人々を驚かせた。第2冊以降は我観社から社名変更した真善美社から刊行。2 非暴力主義：論争ばかりしている花田は、しかし、思想は非暴力主義だった。無抵抗とは異なる。ガリレイやブルーノのようなガチンコの闘争を避けて目立たないような転向(転回)をしたコペルニクスの考えが保守派にもじわじわと浸透していったことを花田は戦時下に「天体図 コペルニクス」で書き、その態度を見習って当時の評論を書いている。「『慷慨談』の流行」は僕の好きな評論だ。

勝海舟・榎本武揚の転向を批判して「瘠我慢しても(もと幕臣としての)筋を通すべきだった」との福沢諭吉を批判している。福沢は吉本同様に情的責任と政治的責任の区別ができないという訳だ。花田は勝を非暴力的リアリストとして評価している。福沢は、私情に殉じて、たとえ相手がどのような強国であろうとも、瘠我慢をはりとおし、自国のために抵抗するところに人間としての美点がある、という。これが後に、若者の戦場での無駄死を美化する口実になった。

花田は、更に後年、武家的なものと公家的なものを対比させ、公的な非暴力性を評価した。女性的な非暴力性も戦時から主張している。フェミニストなのだ。花田自身、「どうやらわたしは、芸術家的一种らしいが、……いくらかアンマに似ている。……なぜなら、一方は精神の—他方は肉体のしこりを揉みほぐし、たとえ一時的にせよ、人びとを楽しませたいとねがっているからである。」と書いている。これをもって、「花田も迫力がなくなった」と評する人もいるが、まあ読み易ければいいではないか。「花田の戦後の著作は評価しない」と言う柄谷に同意見の人々も多い。しかし、花田の思想もスタイルも戦時下も戦後も一貫していることは確かだ。戦時下の「太刀先の見切り」で、小林秀雄を「達人」ともちあげ、彼は「一度も批評をしたことがない」と両断するスタイルに喝采する読者も多いだろう。

本展によれば、花田は七高(現鹿児島大)でボートを漕いでいたが、「応援の方が向いている」と言われ応援に転じた、と。応援部に短期間いてボート部に転じた僕とは反対のケースで興味がわいた。

以上